

全学共通科目「京都大学の歴史」の実践

西山 伸†

はじめに

筆者は、京都大学の全学共通科目において、2002年度から京都大学の歴史についての講義を実施している。本稿では、2010年度における講義の内容や目的を紹介し、本講義の課題を提示する。また、本講義は広義に考えれば最近注目されつつある「自校教育」「自校史教育」⁽¹⁾の範疇に含まれうるものと考えられるので、本講義を手がかりに「自校（史）教育」の現在について合わせて考察することとする。

1 講義の概要

本講義の概要は以下のとおりである。

①科目名：京都大学の歴史

前述のように、筆者は2002年度から京都大学の歴史についての講義を実施していたが、2008年度までは、京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一准教授の講義「現代の大学・大学生論」の前半部分（7回）を担当する形をとって

た。それが、2009年度からは筆者単独で表記の科目名で実施するようになった。

②担当者：西山

「自校（史）教育」においては、複数教員体制がとられるのが一般的なようである⁽²⁾が、本講義では筆者が単独で行っている。なお、前項で述べた「現代の大学・大学生論」においても、京大の歴史については筆者のみが担当していた。

③種別：全学共通科目

京都大学における全学共通科目は、教養教育を主として担っている。本講義は、そのうちのA群科目（人文科学及び社会科学系科目）に分類されている。

④開講期・講義回数：前期のみ、合計13回

⑤受講者数：212名

全学共通科目は、すべての学部・学年の学生が受講可能であるが、一般的に言えば専門教育に入る前の段階の1・2回生が多いことは否定できない。2010年度の受講生の内訳は表1のとおりで

表1 受講者学部・回生別一覧表

	総合人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	計
1	0	12	2	20	5	4	2	0	31	18	94
2	3	0	4	8	1	22	0	3	17	8	66
3	0	0	0	2	4	4	1	1	7	1	20
4以上	1	1	1	3	3	6	1	1	9	6	32
計	4	13	7	33	13	36	4	5	64	33	212

† 京都大学大学文書館准教授

ある。学部については、すべての学部から受講者が出ているが、学年については、やはり1・2回生が多い。ちなみに昨年度の受講者数は190名であった。

⑥教科書：使用しない

毎回教材としてプリントを配付する。参考文献については、ガイダンスおよび各回の講義において適宜提示している。

⑦評価：講義終了後に提出するコメント+学期末試験

講義開始時に、教材に使用するプリントとともにA4判のコメント用紙を配付する。講義は毎回70～75分程度で終了し、残りの時間は講義を聴いて考えたことを記名の上書き込んで提出するよう定めている。各コメントは5点満点で採点し、さらに学期末に論述式の試験問題を2題出題し、その採点結果と合わせて可否を決定している。

2 講義の内容

(1) 構成

本講義の具体的構成は以下のとおりである。

第1回 ガイダンス

第2回 京大キャンパスの歴史

- 1 キャンパスの変遷
- 2 キャンパス以前
- 3 創立期の京大キャンパスと京都

第3回 京都帝国大学の創立

—「自由の学風」の源流—

- 1 帝国大学
- 2 京都帝国大学の創立
- 3 創立期の京大

第4回 滝川事件 —何が問題だったのか—

- 1 発端
- 2 法学部の主張と大学自治
- 3 休職発令から総辞職表明へ
- 4 周囲の動き

5 法学部の分裂

6 事件の背景

7 意義とその後

第5回 戦争と大学 —「協力」の諸相—

- 1 戦意高揚のための措置
- 2 戦時下の教育研究
 - (1) 理工系
 - (2) 文系
- 3 知識人のあり方、言論への責任

第6回 出征する学生たち

—「学徒出陣」— (1)

- 1 制度
- 2 実態

第7回 出征する学生たち

—「学徒出陣」— (2)

- 3 学徒兵たちの記録から
 - (1) 学生生活
 - (2) 戦争認識と在学徴集猶予停止
 - (3) 運命の受容
 - (4) 死と向き合って
 - (5) 学徒兵の多様性
 - (6) 敗戦後への想い

第8回 敗戦と新制京都大学の発足

- 1 敗戦直後の京大
- 2 戦後教育改革
- 3 学生を取り巻く状況

第9回 1950・60年代の大学と学生

- 1 敗戦直後の学生運動
- 2 天皇事件
- 3 武装闘争から60年安保闘争まで
- 4 高度経済成長期の大学

第10回 「大学紛争」とその背景 (1)

- 1 特徴
- 2 外国の状況
- 3 経過
 - (1) 慶応・早稲田・日大
 - (2) 東大

(3) 京大

4 直接的要因

第11回 「大学紛争」とその背景(2)

5 紛争をめぐる様々な言説

6 紛争の背景とその後

第12回 紛争後の大学

1 大学数の増加

2 「四六答申」

3 計画化から自由化・多様化へ

第13回 まとめ

なお、上記の構成のうち第2回「京大キャンパスの歴史」および第12回「紛争後の大学」は2010年度に新たに追加したものである。

このような構成とするにあたっては、いくつかの留意点があった。その第一は、本講義では、例えば全学部の由来を示すといった網羅的・通史的な構成をとらず、年代順ではあるがトピック的なテーマを設定したことである。第二は、「京都大学の歴史」と銘打ちながら、他大学や日本の大学・大学生全般についての史料も積極的に提示したことである。そして第三は、戦前・戦中と戦後のバランスを考慮したことである。「ガイダンス」「京大キャンパスの歴史」「まとめ」を除いた10回の講義は戦前・戦中5回、戦後5回という配分とした。これら三つの留意点は、本講義の意図と関連するので、あとで改めて触れる。

個々の講義においては、A4判の用紙に当日の講義の流れを示し、A3判の用紙に史料や図表、写真(コピー)などを切り貼りし、ともに前述のコメント用紙と合わせて開始時に配付した。本講義では、受講生ができるだけ多くの史料類に触れることが重要であると考え、1回の講義で平均すると20点前後の史料類を配付した。講義全体を通しては、史料171点、図21点、表17点、写真11点を配付した。

(2) 実例

本稿では、講義の実例として第11回「『大学紛争』とその背景(2)」を紹介する。当日配付した講義の流れと資料および資料の典拠を示した一覧は、本稿末尾に添付した。

すでに、一週前の講義において、大学紛争の特徴や慶応・早稲田・日大、東大、京大を取り上げてその経緯について新聞資料などを用いて説明し、さらに大学紛争の直接的要因として、学生数の急増への大学側の対応の不備、抜き打ち的な学費値上げや学生処分に際した大学の「非民主的対応」、ベトナム戦争や高度成長下に露呈し始めた様々な社会のひずみ等が挙げられることを述べていた。その上で、この講義では、まず全共闘等に積極的に関与した学生や教員、そして積極的ではないがデモやバリケードには参加した学生たちが残した当時の史料や回想等を紹介した。中心となった学生の考え方をすることも重要であるが、彼らに同調した学生たちの意識や衝動を見ることもそれと同じくらい重要だと考えた。そうでないと、なぜ大学紛争があれだけ短期間に全国的に拡大したのか分からないと判断したからである。さらに、彼らの考えや行動が次第に他者への非寛容に陥っていく過程を示す史料を何点か示し、運動の過激化と急速な収束を説明しようと試みた。同時に、当時管理者側として関わった人たちや、いわゆる一般学生の史料も紹介し、大学紛争の多面的理解を促した。こうした史料を踏まえ、前回の講義で取り上げた直接的要因とは別に、当時の学生たちの情念の問題として大学紛争を考えることの必要性を述べた。

この講義終了後の受講生コメントの一部は次のとおり。

「大学紛争が起こった中で、また紛争が行われていく中で、学生がどのようなことを考えていたかについて興味深い発言、言説を知ることができた。

初めのほうの史料では、近代文明ひいては当時の社会（近代主義）への懐疑の目が向けられていたが、これは今でも議論されうること、いやされるべきことだろう。つまり現代でもこの問題は解決されていないということだ。この時代から今まで、日本人が近代主義をどのように見ていたのかは気になることである。また、大学の抑圧に対する抵抗という点、つまり脱権威化を目指して始まったという側面があったのに、いつの間にか自らが権威のようになり暴力も辞さずに警察等と対抗していくというのは逆説的である。「人間は曖昧なものに堪えてかねばならない」という発言もあったけれど、多くの人には本当に曖昧なまま運動にくり出したのかもしれない」（文学部）

「先生が大学紛争は政治闘争ではなく、若者達の一種の反抗期だとおっしゃったことには、なるほどと思いました。確かに一部の人は、政治的な構想を持って、運動に参加していたのですが、大部分の人間は何とも言えぬ不満をどこかにぶつけたかったのだと考え、史料にあった、当時の人々の発言と辻褃が合うし、運動の急速な収縮にも説明がつかず。となると、疑問に思うのは、何故近年の若者は、社会に反抗していかないのかということです。映画やドラマでは、喧嘩ばかりしていて、社会に反抗する不良少年・少女が未だに描かれてヒットしているのは、何故だろうと思います。また、選挙での若者の投票率が下がっているなどの若者の政治離れなどが問題になっていますが、そのような社会に対する無関心というものが、今回の講義内容を手掛かりにして考えることができるのではないかと思います。」（文学部）

「学生紛争を「反抗期」ととらえる教授のお考えは興味深いものがありました。戦争で死んだ国が一応「成長」していく、といった構図でしょうか。そういえば明治～戦前もそう捉えられるかもしれ

ません。明治末の社会主義運動などを「反抗期」ととらえられるかもしれません。そうならば、そろそろご臨終になるのかもしれませんが。〔中略〕良い意味なら社会は「成熟期」、悪い意味なら「衰退期」にあるのかもしれませんが。どちらかは分かりませんが、大学の歴史でここまでいろいろ考えることになるとは思いませんでした。やはり振返ればまさかの展開に「面白かった」と思えました」（文学部）

「大学紛争を起こしていた人々はなぜ大学を相手取ったのでしょうか。史料には、大学が政府に属するものの中で一番弱いものだから、大学を相手取ったみたいなきょうが書いてありましたが、普通に考えて一番弱い者を攻撃しても全体が揺らぐことってない気がします。それなのになぜ大学を敵に回したのかよく意味がわかりませんでした。もしかすると、本当は何も変えることはできない、政府やそのバックについているアメリカに正面きって立ち向かうことなんてしよせん無理だと、どこかで分かっていたからでしょうか。そういう部分って日本人だなあ、みたいに思います。無理だと分かっているながら、最後までやるんだ、みたいな勢いが。ひとくくりには言えないとは思いますが」（教育学部）

「大学紛争≠政治闘争という先生の考え方は斬新でしたが、確かにこの運動は「反抗期」とみるとできると思います。というより、大学紛争のことを教わっても、何かモヤモヤとしたものが残ると感じていた原因が分かった気がします。つまり、学生たちが求めていたもの、ヴィジョンが見えないということです。しかし、この点は今の学生にも言えることかも知れません。しかも、彼らと違って行動を起こすこともない……。自分の世代のことながら、この世代はどうなっていくのだろう、と一抹の不安も感じました」（法

学部)

「学生運動に対する認識が変わった。大学紛争はその主義主張ばかりがいつも目について、あたかも全体がそれ一色に染まっていたかのような印象を持っていた。しかし、そんなことは実際ありえず、やはり明確な意図を持って参加していたのは少数だったのだろうが、その他大勢がなぜ関わっていたのか特に考えたこともなかった。それで、文章中の「おもしろいからやる」「青春期の空洞を満たしてくれるように感じる」を読んだとき、いままで自分と断絶を感じていたこの頃の学生がなんだか身近に感じられた。青年期特有の反抗心や破壊的衝動があつた運動に関わつたその他大勢を動かしていたのなら、今まで遠いものとしか感じていなかった大学紛争もなんとなく理解できるものである。僕も若者だから」(理学部)

3 講義の意図と課題

(1) 意図

すでに述べたように、本講義は京大の全学共通科目という枠組みで実施されているものであり、受講生も理系を含むすべての学部にあたっている。そうした中で、筆者の本講義における意図の第一は、これを教養教育として行うということである。

教養教育について、例えば寺崎昌男は、敗戦後の教育改革で一般教育を導入した日本の大学は当初「教養ある専門人」を養成することを目標としていたが、今日の大学教育の目標は「専門性に立つ新しい教養人」を作ることと組み替えられなければならない、と述べる。そして、「大学は、生涯をかけてみずから学ぶ力を身につけ、その基礎となる専門学識を獲得しつつも、しかし卒業までに新しい現代的教養にふれた新しい時代の「教養人」の育成こそめざすべきではあるまいか」⁽³⁾と

主張する。

このような見解に筆者も基本的に賛意を表すが、こうした「教養人」になるいちばんの基礎は、自らの眼でものを見、自らの頭で物事を考える力であろう。受験まで受動的な勉強が中心であったと思われる大学生に、能動的・主体的に思考する力を身につけさせる、それが教養教育の第一歩であり、教員はそれぞれの専門の立場からそうした教育を実践することが必要なのではないかと筆者は考える。筆者の専門は、日本近現代史であるから、日本近現代史上の事象を取り上げて、歴史的にもものを見、考えることの重要性を示すべきであるとして、その素材に京都大学を選んだのであった。この考え方からすれば、講義のテーマが京都大学の歴史である必然性はない。ではなぜ京都大学かといえば、一つには筆者自身が業務としてその歴史の調査研究に携わっているためであり、もう一つには受講生にとって身近な存在であり講義に入り込みやすいと予想したためである。

本講義の意図の第二は、受講生に大学・大学生について考える手がかりを提示することである。言うまでもなく、受講生は京都大学に所属する学生であり、彼らにとっては大学・大学生について考えることは、自らについて考えることにほぼ等しいと思われ、充実した大学生活を送る上で非常に重要なものではなからうか。前述のように、本講義では網羅的・通史的ではなくトピック的なテーマ設定を行っているが、それは各回で取り上げたのがいずれも大学や大学生のあり方が問われた時代だったからである。京大の創立は、従来の東大とは異なる大学を創り上げようとする模索でもあったし、滝川事件は国家と大学の関係を問う大事件であった。戦争や戦後改革、大学紛争なども論じるまでもなくそうであった。こうしたそれぞれの時代に大学に関わつた人々、特に受講生と同世代の若者が何を考え、どのように行動したのかを史料に基づいて示すことによって、受講生が自ら

について見つめられるようになるのではないかと考えた。こうした意図のもとでは、彼らが最も身近に感じる京都大学に関する史料を中心的素材としつつも、必ずしもそれにとどまる必要はないと判断し、他大学関係の史料も積極的に活用することにした。さらに、現在に直結するものとして戦後史を重視するように努めた。

こうした意図が適切かどうか、またその意図が貫徹できているかどうかは、もちろん受講生が判断すべきであるが、第12回の講義終了後に講義全体についてのコメントを求めたので、参考までに提出されてきたものの一部を以下に紹介する。

「もともと地歴公民の「歴史」が好きで名前に歴史が入っているというだけで選んだこの授業だったが、他の授業が妙に堅苦しい内容だったり先生の訳文から哲学をきかされるのに比べて、この授業では毎回毎回当時の人のギリギリトークを読めてワクワクした。今まで習ってきたものは綺麗なことばかりだったけど、この授業は当時の日記とか独特のライブ感があったり今だから言えることや普通じゃ見られない資料など当時の人の心情に惹きつけられる小説のような授業でした」(文学部)

「授業の後半に関しては、まさに現在の私達に直結する出来事ばかりで、日々のふとしたギモンが解消され、とても面白く感じたし、この大学を身近に感じることができた。そして、よく歴史はくり返すといわれるけれど、資料から見ても人々の行動にはパターンがある様に感じられたし、歴史を、あくまでも資料に基づく歴史的事実をもっと多くの人が知るべきだと感じた」(文学部)

「自分の通っている大学について知ることができ非常に有意義でした。京大ができるまでの話、東

大との差別化の話、滝川事件についてなど、非常に興味深かったです。一方で、戦時体制の話や大学紛争の話など、当時の大学生について知ることができました。彼等の手記などから(自分がその立場だったらどう行動していただろう・・・)と毎回様々なことを考えさせられました。どちらが正しかったのか、何が正しかったのか、とか一概に言えないことばかりで、表面的な事実の知識を超えたことを知れたことがとても良かったです」(教育学部)

「『京都大学の歴史』は先輩から勧められて何となく取った授業でしたが、週の中で本当に楽しみな授業でした。私が勝手に想像していただいただけかもしれませんが、授業を聴くと「正しいって何だ」とか「人ってどうあるべきなんだ」みたいな、京大の歴史とはあんまり関係ないことまで考え込んでしまいました。もちろん、答えなんか出ませんが・・・。大学に入って、一番大学で受けるべき授業だと思いました。「考える」ということを唯一させられた授業でした」(教育学部)

「僕は単純に京都大学の歴史に興味があったのでこの科目を履修し、はじめの授業の方は京大の歴史を楽しく学んでいたのだけど、いつの間にかレジメに出てくる若者たちの言葉を自分自身にあてはめて聞くようになり、歴史について学んでいるというより今の自分の在り方について考えるようになっていた。思えば僕たちと同年代の言葉が多く引用されていましたが、これは意識してやっていたことなののでしょうか？」(理学部)

「この授業では、京大の歴史と銘打ってはいるものの、その講義名から推測される以上に、大学や社会にまつわる歴史・事実・問題などを見ていくことができ、非常に私にとって有意義な講義でした。〔中略〕単に一言、大学紛争と言っても、

ただ何が起こったかの事実確認に終わらず、その背景や人間の心理、人間がかたちづくる社会の構造やしくみも垣間見ることができて面白かった。組織という、人間たちで構成してきたものによって、その中にいる人間を圧迫する、というような、人間がたくさん集まって物事をするとおこる現象は、学生運動に限らない普遍的なものである。また、時代の思想の流れに対する各人間の反応の様々、昔の発言と矛盾する発言をするようになって他の人間が違和感を覚えるような人間には絶対になりたくないと思っている私であるが、そんな保証はどこにもないのが残念ながら事実である」(工学部)

「授業全体の感想としては、この講義では京大の華々しい部分がたくさん見られるのだらうと予想していたら、後半は思いの外暗い話が多くて驚きました。こういう過去があるということを知っているだけでも、この京大をいろいろな視点から見るができるようになりとても有意義な講義でした」(工学部)

「歴史を理解するのに、どうして名もない学生の手記や、会話文が史料に必要なのか、最初は不思議でしたが、出来事の連続として大ざっぱに語られる歴史の裏に隠された、そういう名もない人々の生の声が、実は大きな歴史の流れや原動力を理解するのに必要な情報なのだあと授業を通じて感じました。また、戦前戦後で手のひらを返したように変わってしまう価値観や、暴力にエスカレートしていく学生運動など、その時代の流れに翻弄される人々を見ると、彼らを批判したい気持ちになるけれど、僕が彼らを批判できるのは、そういう時代が過ぎ去った現在から彼らの時代を客観視できるという特権を僕が与えられているからに過ぎず、僕自身もまた無意識の内に今の時代の悪い部分に同調してしまっているかも知れないし、

また、今後そういうことがあるかも知れないので、自分も人の事を言えたものじゃないと思いました」(農学部)

(2) 課題

本講義の課題の第一は、科目名と内容のずれである。これまで述べてきたように、本講義は京都大学を中心としつつも、他大学に関する史料も積極的に扱っている。こうした講義の進め方は受講生の当初の予想や期待とは合わない面ももっているようである。昨年度のある受講生のコメントに「『京都大学の歴史』は、大学紛争のような大きなテーマも一般教養としてはよいが、もっと身近な、京大だけと密接に関係したような小さなテーマたまには扱って欲しいと思いました」とあったのは、そうした側面を表していると言えるかもしれない。また、本講義では京大の学問史や、例えばノーベル賞受賞者のような京大出身の著名人、といったテーマは一切取り上げていない。コメントに直接示されていないが、こうしたやり方に違和感を持つ受講生も存在するかもしれない。科目名の付け方を含めて検討するべきであろう。

課題の第二は、大学紛争後の大学についての内容の充実である。大学紛争も約40年前の出来事となり、現在の学生からすると完全に「歴史」となっている。さらにこの40年間の大学の動きや学生生活の変化を考えると、近年の大学までを一連の流れの中で提示する必要があるだろう。前述のように、今年度から「紛争後の大学」を講義するようにしたが、次年度以降はさらに充実させることを検討しなければならない。

課題の第三は、史料の分量と講義の進度の問題である。講義の実例でも示したように、1回の講義で扱う史料は多量である。様々な角度からの史料をなるべく多く紹介したいという意図に基づいてこのような分量になっているが、その結果必然的に個々の史料への言及は表面的となり、また講

義の進捗は非常に速いものになってしまう。教室においては、史料の読み方、捉え方を説明し、持ち帰ってじっくり読むように指導しているが、現実問題としては講義についてこれられない受講生も存在していることが予想される。コメントに示される受講生の反応を見ながら、適切な分量と進捗を考慮しなければならないと思われる。

4 「自校（史）教育」について

「はじめに」で述べたように、近年大学における「自校（史）教育」が注目されつつある。その制度的背景としては、1990年代以降の大学審議会や中央教育審議会における教養教育重視が挙げられ、さらに少子化の中で各大学が自らの個性を積極的にアピールしようとしていることも関係しているであろう。2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」でも、初年次教育における「大学に期待される取組」として「大学生活への適応、当該大学への適応（自分の居場所づくり、自校の歴史の学習等）、大学で必要な学習方法・技術の会得、自己分析、ライフプラン・キャリアプランづくりの導入などの要素を体系化する」⁽⁴⁾と、「自校（史）教育」が例示されている。

筆者は、本稿で紹介した講義が「自校（史）教育」であるという自覚は特に持っていないが、「自校（史）教育」の実態について詳しい調査を行った大川一毅によると、その定義は「大学の理念、目的、制度、沿革、人物、教育・研究等の現況、社会的使命など、自校（自学）に関わる特性や現状、課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」⁽⁵⁾ということであり、そうであるならば本講義もその一つとして分類することは可能であろう。

こうした「自校（史）教育」は何のために実施されているのか。例えば、1997年度という比較的早い時期に「日本近代史と明治大学」という講座

を開始した明治大学は、その開設の趣旨において、講座開設の効用について「本講座を開設すれば、明治大学に学ぶ多くの学生たちに、本学の歴史についての学問的認識・歴史像を形成する機会を保証することができる」とした上で、「しかも、それはただ単に学問的認識にとどまらず、学生諸個人と大学との一体感を作り上げ、精神的に学生と大学とを強い紐帯で結ぶことを可能にする。こうして愛学心やUI（大学との一体感）が形成されることになる」⁽⁶⁾と強調している。また、同じく1997年度に「九州大学の歴史」を開講した九州大学では、その目的について「九州大学の歴史を学ぶことから、九州大学に対するアイデンティティの確立と、本学で学ぶ意義を自覚してもらおうという意図からでありました」⁽⁷⁾と述べている。

この、「愛学心（愛校心）」「アイデンティティの確立」は「自校（史）教育」について語られる際に頻繁に出てくる言葉である⁽⁸⁾。しかし、「自校（史）教育」に関するこうした語られ方や現在の位置づけについて筆者はいくつかの疑問を感じている。

疑問の第一は、「愛校心」「アイデンティティの確立」を目的や効用とした場合、それを講義という形式で実現させようとするのが適当かどうかという点である。講義であるからには、受講生を評価して合否を決定しなければならない、そのためには試験やレポートを彼らに課するのが普通である。しかし、「愛校心」や「アイデンティティ」は評価の対象になりうるのか、筆者には疑問である。「初年度・導入教育における自校教育の実施は「授業という実質」によって大学目的や特性の周知を実現する効果的な手段」⁽⁹⁾という積極的な評価もあるが、こうした形の「自校（史）教育」が学生評価になじむのかどうかは、改めて検討することが求められよう。

疑問の第二は、「愛校心」「アイデンティティ」を教育の目的・効用に挙げている点そのものであ

る。まず「愛校心」であるが、自らの所属する大学について学ぶことによって、大学を身近に感じそれに愛着を覚えるようになる学生が育つことは十分考えられ、喜ぶべきことでもある。しかし、それはあくまで教育の結果の一つであって、主たる目的や効用として挙げられるべきものではないのではないか。「愛校心」を育てることを目的としてしまうと、学生にとって最も重要な、物事を客観的、批判的に見て考える力が養われなくなるのではないかと危惧するのである。また、「アイデンティティの確立」についても疑問がある。そもそも「アイデンティティ」とは何か。例えば『広辞苑』によれば、「人格における存在証明または同一性。ある人が一個の人格として時間的・空間的に一貫して存在している認識をもち、それが他者や共同体からも認められていること」⁽¹⁰⁾とある。これは、やはり大学教育の場で最近時々聞く「自分の居場所」に通じるものがあると思われる。ただ、考えてみれば個人の「アイデンティティ」は単一ではないはずであり、家庭、友人関係、地域社会等々それぞれの場でそれぞれのものがある。もちろん、想定される受講生はある特定の大学に所属している学生であり、在学中は多くの時間をその大学で過ごす存在である。しかし、そうではあるがなぜ「大学生」一般や、「若者」ではなく、「〇〇大学」の学生としてのアイデンティティが確立されなければいけないのか、やはりそこには何らかの説明が必要なのではなからうか。

おわりに

以上、本稿では、筆者が行っている全学共通科目「京都大学の歴史」の紹介と、「自校（史）教育」の現状について筆者の感じる疑問点の指摘を行った。筆者の講義はもちろん、「自校（史）教育」もまだ歴史は浅く、今後も様々な角度からの議論が必要であることは間違いない。本稿がそのささやかな一助になれば幸いである。

〔註〕

- (1) 大学における「自校（史）教育」は、1990年代の半ば頃に始まったのではないかと考えられる（拙稿「『大学アーカイヴズ』の現状と今後」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、2005年、12頁）。最近では、個々の大学での実践紹介だけでなく、それらを総合して「自校（史）教育」の意義を探ろうとする研究やシンポジウムなども行われている。例えば、大川一毅「大学における自校教育の現況とその意義 ー全国国立大学実施状況調査をふまえてー」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第8号、2006年、同「全国大学における自校教育の実施状況ー2008年度「自校教育実施状況調査」をふまえてー」『大学教育学会誌』第31巻第1号、2009年、『大学教育研究フォーラム』14「自校教育の到達点と今後の課題」立教大学、2009年、湯川次義・久保田英助・野口穂高・大岡紀理子・大岡ヨト「『自校史教育』に関する基盤的研究」『早稲田教育評論』第24巻第1号、2010年、など。
- (2) 大川前掲「全国大学における自校教育の実施状況」176頁、によると、大川の実施したアンケートへの回答196授業中82%にあたる160授業が複数の教員によって担当されており、1名の教員ですべてを担当しているのは36授業に止まったという。
- (3) 寺崎昌男『大学教育の可能性 教養教育・評価・実践』東信堂、2002年、93頁。
- (4) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」2008年、36頁。
- (5) 大川前掲「大学における自校教育の現況とその意義」11頁。
- (6) 前掲『大学教育フォーラム』14、76頁。
- (7) 新谷恭明・折田悦郎編『大学とはなにか 九州大学に学ぶ人々へ』海鳥社、2002年、5頁。
- (8) 他にも、大川が紹介している国立大学「自校（史）教育」のシラバスには「この講義から、本学の学生として何を学んでゆくべきかについて考え、自らが将来の計画を創り上げるための基礎を確立して欲しい」や、「大学の歴史を題材としながら、

大学の現状と課題について学生に理解させ、一人一人が本学構成員としての意識を高め、本学及び自身の未来を主体的に切り開く観点を持ってもらえるように特に留意して授業を展開している」などの記述がある（大川前掲「全国大学における自校教育の実施状況」174頁、圏点筆者）が、これらも各所属大学の学生としてのアイデンティティ

の確立を目的（の一つ）としていると考えてよいであろう。

- (9) 大川前掲「大学における自校教育の現況とその意義」12頁。
- (10) 新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、2008年、8頁。

講義資料

全学共通科目「京都大学の歴史」

「大学紛争」とその背景（2）

2010.7.7 西山

5 紛争をめぐる様々な言説

文明への問い [史料1]、「産学協同」への疑問 [史料2]

加害者としての自己 [史料3] → 「自己否定」

現在の大学秩序の否定＝現体制の否定 [史料4]

研究者観、先駆性論、「欺瞞」との闘い [史料5]

実力行使の正当化（体制側の暴力、古典的マルクス主義） [史料6]

「戦後」・上の世代に対する告発 [史料7、8]

参加した学生の意識、衝動、気分 [史料9、10、11、12、13、14]

参加の事実上の強制 [史料15、16]

他者への非寛容、追い詰める道具としての「自己否定」 [史料17、18、19]

「一般学生」 [史料20]

管理者 [史料21、22、23、24]

社会から

6 紛争の背景とその後

「情念」の問題として

正義感・潔癖性（←民主主義教育）

「単純な」発想（敵の設定、激しい攻撃）＋先駆性論 → ドグマ（「全○○」）

大学・人間への期待（「連帯」「欺瞞」「売り渡し」）

社会の急速な変化→「不定型の不安」、いらだち→大人社会への反抗

運動の細分化・過激化→学生運動離れ、政治離れ

大学改革への影響（反面的）

言葉の力の衰退（言い逃れ、無責任、権威の崩壊） [史料25]

理想主義の退場→現実主義、私生活中心主義

多様な社会運動の先駆け的位置

おわりに

資料一覧

- 史料 1 最首悟「私にとってのパラダイム・チェンジ」（荒岱介ら著『全共闘三〇年時代に反逆した者たちの証言』実践社、1998年、222頁）。
- 史料 2 NHK取材班『NHKスペシャル 戦後50年その時日本は』日本放送出版協会、1995年、287頁。
- 史料 3 東京大学新聞研究所・東大紛争文書研究会編『東大紛争の記録』日本評論社、1969年、236頁。
- 史料 4 京大新聞社編『京大闘争 京大神話の崩壊』三一書房、1969年、263頁。
- 史料 5 山本義隆『知性の叛乱』前衛社、1969年、135、66、248頁。
- 史料 6 秋田明大・今井澄・大川正行・田村正敏・山本義隆「権威と腐敗に抗して 日大・東大共闘会議・座談会」（『中央公論』1969年1月号、189頁）。
- 史料 7 高橋和巳『わが解体』河出書房新社、1997年、74頁（初出は1971年）。
- 史料 8 師岡佑行「偽りの「反戦・平和」の告発 「わだつみ」像の破壊の意味するもの」（情況出版社編集部『全共闘を読む』情況出版、1997年、195頁）。
- 史料 9 高野悦子『二十歳の原点』新潮社、1979年、65頁（初出は1971年）。
- 史料 10 長谷百合子「全共闘で学んだこと」（女たちの現在を問う会編『全共闘からリブへ -銃後史ノート戦後編-』インパクト出版会、1996年、106頁）。
- 史料 11 亀和田武・柴田翔・島田雅彦「たしかにあそこで何かが変わった」における柴田翔の発言（筑紫哲也編『全共闘 -それは何だったのか』現代の理論社、1984年、148頁）。
- 史料 12 森毅『ボクの京大物語』福武書店、1992年、74頁。
- 史料 13 加藤典洋「主義主張ではなく否定の「気分」で」（毎日新聞社編『1968年に日本と世界で起こったこと』毎日新聞社、2009年、111頁）。
- 史料 14 後藤正治『人物ノンフィクションI 一九六〇年代の肖像』岩波書店、2009年、3頁（初出は1998年）。
- 史料 15 『朝日新聞』1968年1月16日付朝刊。
- 史料 16 「「大学問題をめぐって」ティーチイン」（史料4に同じ、349頁）。
- 史料 17 『毎日新聞』1968年9月22日付朝刊。
- 史料 18 史料2に同じ、362頁。
- 史料 19 小田実『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館、1995年、543頁。
- 史料 20 片山芳洋「学生運動と茶道→日本人の心」（東京大学昭和四十五年度卒業式取材班『三十年目の卒業文集』角川書店、2002年、119頁）。
- 史料 21 石川忠雄「慶應義塾大学の紛争」（大崎仁編『「大学紛争」を語る』有信堂、1991年、29頁）。
- 史料 22 加藤一郎「東京大学の紛争」（史料21に同じ、134頁）。
- 史料 23 奥田東・岡本道雄・上柳克郎「京都大学の紛争」（史料21に同じ、224頁）。
- 史料 24 『京大広報』第340号、1987年11月1日。
- 史料 25 川上徹・大窪一志『素描・1960年代』同時代社、2007年、244頁。

史料2

こうした東大における「産学協同」の矛盾が具体的な問題として噴出した学科の一つが、工学部の都市工学科だった。

都市工学科は、一九六四(昭和三九)年に建築学科の都市計画部門と土木工学科の衛生工学部門が合体するがたちて設立された。高度成長に伴う過密・過疎問題、しだいに深刻化していた公害問題の解決などが研究の大きな柱であった。まさに、高度成長の落とし子のような学科である。

学科の新設と並んで工学部八号館が新たに建築された。正面玄関のプレートには、その建設にあたって産業界から多額の寄付が寄せられたことが記されている。文字どおりの「産学協同」としてスタートした学科であり、やがて東大闘争の最激戦地と言われるようになる火種を最初から抱え込んでいた。

小さな火種はいくつもあった。たとえば、新空港建設問題で揺れていた千葉県成田市の都市計画や、公害が問題になった三重県四日市の都市計画、さらに賛否両論あった茨城県の筑波研究学園都市計画などは、いずれも東大の都市工学科が手がけていたものである。

中立的立場に立っているように見えながら、実際は行政のお先棒を担っているだけではないのか。住環境が整備されていないのに産業界の整備ばかりを急いでいるのは、おかしいのではないのか。今のやり方は住民参加が保証されていないのではないのか。……もともと学生たちの問題意識は膨らんでいた。東大闘争が起きると、「今こそ研究のあり方を考え直そう」という機運が盛り上がりつつあった。当時、都市工学科の博士課程に在籍していた桜井国俊(現在五三歳)は、排水処理と水質汚濁を専攻していた。桜井は、静岡県富士市にある田子の浦港のヘドロ汚染問題をめぐって指導教官と対立することになる。

田子の浦港では、地元の製紙工場の排水が農業用水路などを通じて港内に直接流れ出し、ヘドロとなって海を汚染していた。静岡県はこれを解決するために「岳南排水路」と呼ばれる工業排水路を建設し、田子の浦港の外側にある広い駿河湾に廃液を放出して問題を解決する計画を進めていた。水汚染問題に関する静岡県審議会メンバーには東大都市工学科のある教授が加わっていた。桜井は、現地に赴いて調査するなかでその計画書を読み、愕然とする。そこには、「海中放流方式」のメリットについて次のように書かれていた。

「海中放流方式……(この方法が)一般と異なるのは、汚水に清水を加えるのではなく、海水(清水)に汚水を加えることになり、かつ相手は無底層の海中である」と、また海中の各種自浄作用により短時間に滅菌作用もあるというところである。(朝日ジャーナル 一九七〇年八月三日号)

その教授は桜井の元指導教官だった。衝撃は大きかった。

「調査は必ずしも良心的にきちんと行われていなかった。教授は現地にも行ってはいない。それなのにこの程度で大丈夫だとか、あたかも、みずから現地を調査したかのような印象を与えていた。もちろん代わりには誰か見に行かなくてはならない。結果的に加害者の側にまわっているという構造だ。むしろ、もつとほつきり言えよ。そのためにこの東大大学があるんだと、われわれはあの時考えたわけだ」

東大でこのまま研究を続けていけば自分もいつか加害者になるのではないか。桜井は、博士学取得を目指して闘争に参加した。

史料4

受験生諸君へ訴える — C 闘委 3月3日

1 我々C闘委は何故「入試強行」に反対なのか
第三項目要求(無条件増募)二十年長期計画白紙撤回
経理全面公開を掲げて学生部封鎖に突入した1・16以来、我々は一貫して現在の大学が内包する諸々の矛盾をあげ出し、告発してきた。文部省あるいは奥田国大協自主規制路線と真向から対決する第三項目要求に対し当局は一切答えることなく、外部部隊排除という名目で本部構内をバリケード封鎖して学生部に対して封鎖実力線を行ない、寮闘争を圧殺せんとした。そしてあの狂気の三日間の責任を追及する大衆闘争に於て、自ら陣頭指揮をしていた奥田学長は、一切の責任を共同責任という無責任に回避して、結局誰が責任となるのかをこまかして、

こうした治罪と、闘争破壊に狂奔する民衆に対する大衆的な怒りは1月30日に爆発した。この日教養部代議員大会は、奥田自己批判要求、第三項目真敢を骨子とする八項目要求を掲げて短期限ストに突入することを圧倒的支持で可決した。

これに対し当局はこの無期ストを無視無殺するばかりか日共、民青に最大の期待をかけ、彼らの闘争破壊の様々な策動を黙認することによって援護してきた。

このように我々が現在の大学秩序につきつた問題提起と要求に対して、大学当局は解決への努力はもろろ見解すら表明しようとせず時間かせぎを計っている。そして今や「入試強行」という一点に問題をすりかえています。

一方に於て我々の正当な要求を黙殺しおきながら、秩序回復の一面として入試を強行しようとするのは、明らかに闘争破壊であり、我々は断乎として反対する。また当局と日共、民青がやっきになって実現しようとするもの即ち現行の入試制度は、諸君自らも感じているように矛盾に満ちている。それは「学問」とは無縁な次元に於て「メーバー」一枚の良し悪しによって「エリート」を差別する機構なのである。現体制に奉仕するエリート養成の差別と競争の論理が貫徹している入試制度はまた、現在の教育体系の矛盾の集み点なのである。現体制に於る「エリート」養成工場と化した大学を拒否し、そのためにのみある現在の大学秩序を否定する立場から、C闘委は現行の入試制度そのものへの反対の立場をとる。

2 大学には「青い鳥」がいるのだろうか
我々も、大学入試を受けて入学した。当時は大学に何かを求め期待を抱いていたように記憶する。少くとも不正と腐敗に満ちた東大の矛盾の本質を何も意識していなかった。といえる。閉ざされた受験生活と「流石とあれれ大学」といふ教育の中で育ちあがられた「流石とあれれ大学」としての偶像「京都大学」、何らかの可能性を信じて入ってきた。

りだ。しかし一切は幻想であつたのだ。マスプロ教育課程制、委託研究等の矛盾や問題点に不満を感じ、これと真剣に取組みはじめた時から我々は現体制の壁につきあつた。真剣に「学問」を追求する者にとって、大学の問題に体制の問題でありそれらの一切をそのまま自分自身の「不承不承」で考へざるを得なくなるのである。従って、現在の大学秩序を認めるか否かが即ち現体制を認めるか否かの問題であることと強く肩すすめば、我々にとりては、現体制に屈服するのしかれどもそれに対決するのしかつたり「者取」しかなないのである。後者は遠い困難な道であり、自ら不屈の闘いを続けねばなりません。

諸君は何を求めてこの巨大な入り口としてくるのか。青い鳥を求めた青い鳥はどこにもいなかった。青い鳥を求めた青い鳥はどこにもいなかったのだ。学問も、真理も、そして何よりも「人間」がどこにもいない。ただあるのは、資本と体制に属する「権威トリ」(学位トリ)ばかりなのだ。

メーテルリンクの「青い鳥」は教訓的ではある。どこを探しても青い鳥はいきしない、自らの手でつくり出すまでは。真の大学を、真の学問を追求するが故に資本に甘んじがらめにはばられ、しかもそれに甘んじがらめにはばかっているような現在の大学を拒否し、体制を告発する我々は、エリートたる自己を否定して非妥協的に闘うことしかないのである。

3 我々には用意された出口はない
受験生諸君が京大に入るとして、他の道を進むにしろ我々が今血みどろになつて取組んでいる矛盾は社会的なものであるから、いずれ進んで来るであろう。資本主義の高度化の中で、そして権威と秩序の内実が暴露されそれが互壊しつつある大学の中で、君が何をしようとするかという問いが問われているのだ。我々はのすぐれて現代的な闘いの中で自ら生きるという問いが、強固な自立した自己を形成し情動でない自らの論理と行動を未だ誰もし得たことのない闘いのさなかで貫くことであるとは、きりと自覚した。

我々の非妥協的な闘いは始。たばかりである。本質を暴露した機動隊の脅威な弾圧、全組織あつての日共の闘争破壊、当局の黙殺の暴力、これらに抗する我々の前途は決して平坦ではない。しかし我々は屈服を拒否し、あらゆる弾圧、妨害をはねのけて闘うであろう。

我々が自ら切り開いた地平を、思慮性を賭けた闘いで突き進もうと、気がついてみたら、出口なしの状況にいた。この闘いの闘いに於て一切の主体性を抜き去って未来を予測できないからである。出口は、自らの手と「メー」をあると、創り出すしかない。何を手段に、どんな出口をつくるのか、この一切は我々と諸君の攻撃的知性の中にあるのである。

史料1

—二世紀を前にして、地球環境問題が大きな問題になっていますが、最首さんは全共闘のとき助手共闘の一員として活動されたそうですが、そこでは公害の一面でも研究者や大学のあり方を問うていますよね。

●日米で六〇年代の権柄は違いますが、重なりあっている六〇年代末の学生反乱があった。これは政治的反抗というよりは文明的反抗としてのもの。根が深いこと。

六〇年代末の学生反乱として、研究者が直接のきつめはベトナム戦争です。ベトナム戦争が学生の関心からいって、ベトナム戦争が忘れられていた科学技術の恐ろしさを思い出させた。もちろんベトナム戦争が原爆投下の惨禍も科学技術の産物なわけだ。それにみれば、日本の天皇制が起した戦争の記憶もあつた。日独伊のような全体主義アメリカに代表される自由主義とどっちを選ぶか、という選択だったんですね。そうした権柄のもとでは、原爆投下における科学者の責任という問題が懸念されてしまふ。

ところがベトナム戦争では、アメリカが掲げた大義が全然信じられなくなつていった。むしろ、ベトナムをベトナム人のものに、という解放戦線の主張の方に大義を感じたんですね。米ソ代理戦争の側面がなくなるとはいえ、解放戦線のたたかいは第二次大戦後の民族解放の流れと合致してはいる。しかもアメリカは、あまりにも残酷な科学技術の使い方をした。とくにひどかつたのが核兵器です。

略

それが理系の学生にどうして何のための研究かという問題を自ら突きつけることになつたんです。もう科学研究における「真理探究」が絶対的、あるいは無条件の善だとは思えなくなつてきたんですね。だから「祖国と学問のために」というスローガンは強い違和感を持つたんです。

—東大闘争で出された立て看板の中で、「研究者にとって東大闘争とは？」と大書されていて、「東大闘争は決して大学制度改革ではなく、学問的営為全体に対する根本的な告発として闘われている」と書いてありました。そのあたりの問題意識についてもう少しうかがいたいんですが。

●本人たちはよくわからずじまつてたんだけど、(案外、最初)は、日本の巨額不正経理問題にして、「九六八年の東大の冤罪処分」現場にもいながら学生が「医局長を拘束した」との濡れ衣を着せられて処分された事件です。これは、単純な正義感とか冤罪への憤りから立ち上がったわけだ。大学においてそういう冤罪が繰り返されるのは何ぞや、とてことごとくたれた途端に話が進んでいかざるをえなくなつた。なぜ教授たちは冤罪として認められなかったのか。それは彼らが自分たちが敵視されると信じたこと、その根拠を手放したくないからなんです。だから、その東大の学生である自分自身なのか、エリートの自分を否定することなのか、教授一人告発できない。ましてや大学や産業界を批判するとはできないじゃないか。私は一九六七年に東大教養部の助手になつたから、学生から告発されながら、同時に自分の上の人たちを告発する、というジレンマのなかでいました。

「ベトナムが崩れてくるとして、誰も新しいベトナムは言えないけども、何か突き動かされる。それが解体であり破壊なんです。恰好よく言えば、建設のための解体なんです。自己否定というのをもまぎらすんです。」

史料2

都市工科大学院ストライキ実行委員会情報部／全学の大学院生・研究生・研究者「へのアピール」研究者にとって東大闘争とは？(68・11・12)

◆東大闘争は我々の何を告発するの？

我々は現在、激烈な東大闘争を闘っている。東大闘争は決して単なる大学制度改革ではなく、学問的営為全体に対する根本的な告発として闘われている。即ち、日常の地帯での研究者としての規定そのものを問題とし、「まず我々は、歴史的・社会的に規定された存在としての人間である」という観点から「研究者の我々」を問い直していく。そのことによつて逆に「学問」「自体の存立基盤を明らかにしていくことが実践されてくるのだ。そして、この過程で既成のあらゆる領域の研究は、その存立基盤に対する盲目性によって痛烈な断罪を加えられているのだ。即ち、いかなる研究も決してその学問の対象の個別主義的、技術的・即自的把握をもって「研究」となるを僭称できないということが宣言されたのである。

◆聖職者の意識を「加害者意識」に転化せよ！

封鎖に反対している人たちがそうであるように、自らをあつかもする社会に対して第二者の、外在的な存在であると自己規定し、「科学技術そのものは」という形で技術の普遍性(超階級性)を語ることによつて、論理抜きで「科学・技術の洗練」「進歩」はとてかか良いことなのだ」という神話的価値づけがなされる。そしてそれらのことと近親相縁の関連をもたせ、科学技術至上主義、研究者の聖職者意識が胎動し、かくして「何はともあれ、研究者は研究を第一とすべきだし、研究の自由も保障されるべきだ」というの、つまり、研究者エゴが長子権を獲得して排他する。しかし考えてもみよ。『研究者』は、とりわけ東大の『研究者』は、「何はともあれ……」と言えざるより、実は特権的人間ではないのか、そういふ形で我々はこの社会の剰余価値によって、労働者階級の搾取される労働者として自己の生活を支えているというの。しかも体制(資本)を搾取されているという形、労働者階級に寄生するという形に於いて。ここに於いて「まず我々は社会に対する重層的な加害者としてある」と言われなければならない。『研究者』は、そもそも分業形態の中で科学技術に専念することによつてますます知識の特権的独占者としての個別性・寄生性の根柢を深め、一方その知識を独占的に買収されていく。このような存在を「聖職者」と呼ぶのだろうか。むしろ矛盾を深化させる担い手として社会に対する「加害者」ではないのだろうか。そして更に工学(技術学)に於いて、端的にみられるように、「社会の要請」と「学問の確立」という美名のもとで、実は質

5-3

種限的に進歩した近代自然科学のなかで、闘いは自己の分裂の克服からはじまる。矛盾は研究者と文部省や、研究者と研究制度の間にあるのではなく、研究者個人内部にある。ぼくたちは王子や三浦の闘争に参加した。しかし、その結果として平和な研究室があり、研究できるというのにはたまたまな状態である。研究室と権頭の亀裂は両者を往復しても埋められない。

では研究を止めるべきか。それは矛盾の止揚ではなく矛盾からの逃出口ではないか。徹底した批判的原理に基いて自己の日常的存在を検証し、普遍的な認識に立ちかえる努力をすること。そうして得られた認識に従って、社会に寄生し、労働者階級に敵対している自己を否定し、そこから社会的変革を実践する。抽象的にしか語れないが結論らしいものはこうではない。

それは一時的にせよ研究の進歩を止めてでも闘うことを意味した。研究者として研究を放棄し、研究室を封鎖・自主管理してゆくなかで、改めて研究をトータルにとらえかえす作業が必要とされた。現在の政治的・社会的状況を考えたとき、結果として研究者たり得なくなるかもしれないが、それは別問題である。真に研究者となるためにぼくたちは研究の放棄を主張せざるを得なかった。

この結論から出てくる行動は、「なにかをかち取ったら、勝利」と総括して闘争を取める「ということには当然ならない。むしろ大学で、研究室で、そういった闘いを系統的に進めることを意味する。当然その先は安福闘争にもつながっている。『全共闘』はたとえ『七項目』をのんででも闘争をやめないだろう（はじめから『七項目』を受け入れる気がないので）というところは言えるはずがないが、それはまあ問わない。だから民青や一般学生と手を打って紛争を取捨させる」という大学当局の論理は、冷酷な官僚の論理であり政治家の論理ではあっても、研究者の論理ではない。

こういった論理のゆきつくところは、ぼくたちの要求とごたごたなく、機動隊を使っても全共闘を圧殺することである。ぼくたちの闘いにとり、より重要なことは政治的考慮よりも闘いを貫く思想の原点である。もちろんぼくたちはマスコミの言うように「玉砕」などほしくない。一人になってもやはり研究者たろうとする。ぼくも、自己否定に自己否定を重ねて最後にただ一人——自覚した人間になって、その後あらためてやはり一物理学者として生きてゆきたいと思。

しかし、日本にベトナムを持ち込まないことが日本の平和を守ることではないように、研究室が戦場にならないことを願うことは「大学の自治」や「研究の自由」を守ることではなく、研究者のエイズムを守っているだけである。ぼくたちは研究室を戦場としてでも闘いの狂戦士に反撃する。まして攻撃が焦点に向けられたならば、何を使ってでも守り抜くであろう。知性に誠実であるためには、それ以外に何があろう。政治家や官僚との論理に、ぼくたちが一年間の思考でたどりついた論理を売り渡すことはできない。

覚えす、つたないことを書き散らしたが、これは東大闘争の中でシザクしつづつ歩んだ一研究者の思考の軌跡である。ぼくたちは闘争のなかでつづつ論理を検証し、ややもすれば日常性に回帰し論理の深化にゆきかえり、ぼくたち自身も弱さを自己批判しつづつ、歩んだ。外に向かつては告発の対象を拡大しつづつ、内に向かつては磨きをかけていった。

東大闘争は帝国主義国家的知的中核に位置している精神のコミタメ的な東京大学の腐敗の中で、攻撃の知性を復権させる闘争であった。だが東京大学は告発したことも出来なかった。たまたま当局は「入試実施」を合言葉に旧体制の復帰に狂奔し、あつたにぼくたちがを国家権力に売り渡した。空前の弾圧下で奮闘し、逮捕させ、告訴までした東大当局を、満身の怒りをこめて弾劾する。

田村君もいわれたけれども、現在の小中学校の義務教育、高校・大学の高等教育は超歴史的、超階級的なものではなく、明らかに現在の高度化された資本主義社会の良質の労働力を生産するためのものだ。それはプロレタリアートの立場からの教育とはぜんぜん位置づけが違ってくる。教授たちは、自分たちはそんなことと無関係だというのが、客観的な真理を探究するにしろ、学生にそれを伝授するにしろ、今の状態では所詮は反人民的、反階級的な矛盾から逃れたいということから彼ら自己批判せよという形づつきつてゆかなければならぬ。

甲略

今井 客観的にいって、坐り込んで暴力反対というのは結局は体制支持者であり権力の手先です。しかも彼らの行動は自己矛盾がある。彼らが暴力反対をいって坐り込み、さまざまな形相でぼくに対してヘルメットをとれと叫び、あるいは棒をもっているのが少数の場合、多数を取囲んでいざまわ、実力で棒を取り上げる。カンパに対する妨害だ、てびくたつて、リンチも起っている。あの姿を見ると、彼ら自身もわめて暴力的で、それこそ論理矛盾に陥っている。

共闘会議の学友はただ暴力を振っているのではない。現在の社会的条件に規定されて、権力支配が今日のように暴力的な本質を暴露するのに対して、われわれも暴力をもって立ち向かえばならないということなんだ。

史料

先日、立命館全共闘の学生諸君によって「わだつみ像」が破壊されました。私は、大学に対する、社会に対する、われわれ自身に対するこれほど衝撃的な告発はなかったように思います（拍手）。告発者は、われわれでなく、若い学生諸君でありました。私自身告発者でなく、ただ、突きつけられた問題に迫られ、その問題について闘ってきたというのです。今ここに、明らかにしておかなければならないと思うので、あの一わだつみ像は、反戦平和のシンボルとして知られておりました。あの像は、はじめ、東京大学の構内に立てる計画であったものを、東大当局が許さなかったため、立命館十学がこれをひき取ったものであります。

一九五三年一〇月、像が京都についた日、京大から出発した学生隊は、鴨川にかけられたつづみ橋で警隊と衝突し、多数の負傷者を出しました。当時、学生であった私は、立命館の「わだつみ像」を見ることに、この流血と激しい抗議行動を思い出さなければいけません。だが考えてみれば、「思い出す」ということによつてそれは「反戦と平和への目覚め」になっていたのでないかということも、いま、反省するわけでありませぬ。（異議なしの声、拍手）

毎年、二月八日には、わだつみ像の前で「非戦の誓い、反戦の誓い、不戦の誓い」なるものが行なわれますが、私はそれを、苦しい思いで見つめざるをえません。一九六七年の二月八日の闘いで多くの学生が傷つき、なかんずく、あの時にくつた山崎博昭君を犠牲にしたのは、立命館大学の学生だというフレーム・アップが権力によつてなされた。にもかかわらず、「平和と民主主義」を誇る立命館大学は、それよりも動かなかったのです。学生課の職員を一人として東京に派遣しようともせず、マルクス主義を標榜する有力教授は、「暴力学生とわが学園とは無関係だ」というようなことを、平気で語っていたのであります。

そして、二月八日の闘いは別に、二月八日には、例年どおり「不戦の誓い」なるものを「わだつみ像」の前で執行したのであります。このように、「わだつみ像」に象徴された「反戦、平和」は、今日の権力による、ベトナム戦争、加担とアジア侵略、帝国主義のアジア支配に向けられた激しい闘いとは全く断絶したところにあつたのであります。いよいよ日本における現在の反戦闘争の具体的な展開——羽田闘争から、昨年の一〇月二日、さらに今年の四月二十八日にいたる、そして六月、さらに来年にいたる——この激しい闘いを振起して、「反戦」を口にするわけにはいかないとあります。だが、あの「わだつみ像」は、これに敵対する人々によつて愛撫され、しかも「反戦、平和」のシンボルとしてもはやされていたわけでありませぬ。しかし、さうでない多くの人々は、この像を作り、この像を立命館大学に置くことによつて、「反戦、平和」の夢に眠りこけておつたというふうにいなければならぬのではないかと、思うのであります。これは偽りの平和です。偽りの反戦です。全共闘の学生たちは、この像を無惨に打ち壊すことによつて、偽りの反戦と平和というものを、はっきり告発したわけでありませぬ（拍手、異議なしの声）。七〇年を前にして、何もしていないというところが、罪悪感であるという点を暴露しました。力ない教師の、この苦しい思いとつばやきを、学生諸君の行動は、一挙に社会的発言として押し広げたのであります。

私たちは、この「わだつみ像」破壊を、現在の状況に対する、いいかげんな、そして、口先だけの人々に向けられたものとして受けとめなければならぬと思います。萬所備安の態度で日々を過し、しかもそれを、偽りの美辞麗句でおおひ隠そうとする已れ自身を告発するものとして受けとめなければならぬというふうにか考えるわけでありませぬ。

「一つの時代が過ぎてから、多くの友人と話してみると、マルクスもレーニンも誰もがほとんど正確に理解していない」とに驚かされたが、考えてみれば「一九世紀的言説が二〇世紀の後半を生きた私たちに理解できなかったのは当然のことだったのかもしれない。事実、私たちが行動に駆り立てたのは決してそうしたイデオロギーでも思想でも理論でもなかった。理屈は後からついて来る。である。むしろ、戦後生まれの私たちの世代にとって、旧態依然の秩序や常識が後生たりにこないいらだちのほうが重要だった。たとえ、一流大学に入ることで人生のパスカードを得るとか、女は男ほどの学力は必要ない。勉強を多くしなくても卒業できる大学と、それに比べてやたら消耗な受験勉強とか、天皇と軍部だけが悪いと総括する戦争観や、大人たちのもつていないアジアに対する差別意識とか社会のヒエラルキーとかの考え方に對する違和感のほうが大きかった。そしてその違和感をそのまま受け入れてくれたのが全共闘だった。歴史は古い時代のカビ臭い価値観を終わらせて、新しい価値を求めている。そしてその改革の鏡は自分たちの手の中にある」と熱い思いを抱いた。

「まあ、これから新しい時代に向けての歴史的ビッグイベントが始まりますよ」それは、先輩たちのオルグやマスコミの報道だったり、校門のところで手渡されたビラだったりした。とまれ、歴史への参加・未来を切り拓く試みと認識しているわけだから、いくつ深刻ぶつても心の中はワクワクしていた。あらゆる権威や権力に対し傲慢に振る舞えもした。「東大解体」や東大の門柱に書かれた「造反有理」はますます私たちを元気にしてくれた。が、そんな楽しい時代はそう長くは続かなかった。一九六九年一月一八日から一九九日にかけての東大安田講堂が警察力によって封鎖を解かれたが、これを前後して全共闘運動は解体の道を歩み始めていた。むしろ、私のいたお茶の水大学の運動も終息に向かった(他大学生をまねて学生部長室占拠といさましくでもたもの、女子学生で大学内に泊り込める人はほとんどいなくて、私をふくめた数人の地方出身者で守りぬくのはきつかった。その過程でおこったことは、運動の高揚期には仲間同士の価値観の一致を求めず、一〇のうち一つ同意できれば仲間として、優しい連帯で結ばれていたのとは逆に、わずかの差の違いを探し、自分たちの正統性を主張し他を排斥し始めた。

全共闘運動には光と陰がある。陰の時代に入つて、イベントの招待状は実はタダではなかったことに気がついた。ケガをしたり、豚箱に入られたり、それがもとで、卒業できなかつたり、就職活動がうまくいかなかったなどは典型的なツケ払いだった。が、何にもましてきつかったのは、仲間同士の内ゲバである。さすがにわが女子大ではそこまでいかなかったが、想像をこえたところまでふみこんだ運動に未練はなかった。

史料13

月革命は六八年で、アメリカではパルサー校などでベトナム反戦運動がおこる。そういう時代的なものが全部連動していた。日本独自のものと言えば、日韓条約に関連しての日韓問題があったし、経済的には高度成長期だけれども、公害問題など、六〇年代はじめのバラ色がだんだん破綻してきた時期だった。また、「家族帝国主義」への反対も叫ばれていて、「共同体的家族は崩壊してゆく。村落共同体的、ふるさとの家族は崩壊して家庭から離脱する」と学生が考えていた頃でもある。これをすべて「時代がそらだ」と言っていて、まえば身もフタもないけれども、東大の医学部の問題、中央大学の学生会館の事件、明治大学の学費値上げ問題などきつかけになったことにはあるが、それだけが原因じゃない。時代の流れとしか言いようのないものがおそらくあつたと思う。京大も、東大が安田講堂に入っているんだから、ウチでも何かしなきゃ」という感じだった。東大は六八年から安田講堂に籠もっていたから、京大の血の気の多いのは、東大に出張し、逆に東大の法学部の学生は、授業がないので京大に聴きに来る。聴きに来る学生と同じく、いの数が、パルサーで安田講堂に行っていたんじゃないか。

四〇年前の大学紛争とは何だったのか、というのが与えられた問いだが、私の中では六八年は六六年と地続きである。都市風俗と大学紛争と。とにかく主義主張ではなく、気分それが一番当時の過良、社会の人々と違っていた。

私は生意気なことに教師、先輩を含め、自分より年上の人間を認めていなかったようである。六八年四月に本郷に進学し、取り澄ましたキャンパスをした年長の人々が歩いてのを見てこれオレの来るところではないと感じ、休学を決めた。四月の末から駆け落ちした友人が動く大阪・釜ヶ崎地区に悪友と二人、身を落し着けた。労働者として造船工場、友人の狭いアパートに無賃車のように居候をきめこんだのだから、来られた方もなまったものではない。その後、大学がおかしくなり、ストライキ騒ぎが起こり、東京に戻ったのが六月前後。七月二日の文学部学生と安田講堂占拠という経緯から、参加したのが、東大闘争に関わった最初である。

このとき、たしか山上会議所だったか、文学部のノンセクトの学生が集まり、講堂占拠の根拠があるかどうか話し合った。議論が熱語まわったとき、一人離れて窓辺でタバコを吸っていたアパリストの学生がいや、面白いからやるんだよ。ぼそっと呟き、この一言にみんながやられた。「別に議論が出て、占拠、この三日後に東大全共闘が生まれているが、私にとつては、本郷の雰囲気は身体がなじまなかったこと、またこの面白いからやる」が、いまでも大学紛争の意義のほぼすべてである。

その後の展開で、「エリートとしての」「自己否定」の論が流行り私も捕まった。前段とは理屈が合わない。この運動も私も論理的一貫性には欠けていた。一度、七項目要求というものを掲げた構内デモの隊列にてこの七つの項目とは何かを思い出そうとしたが四つくらいしか思い出せない。オレもかなりいい加減だな、と思いつつながら行進を続けたことをおぼえていた。その一方で、これだけは「貫して、自分の中に実に野放図な「大衆感情」が生きていた。こんな取り澄ました社会は糞食らえだ」という否定の「気分」。心許ない存在だが、それがいまお、私がこのときの経験を肯定する理由である。

史料9

○二月二十日（水）

立命館に機動隊入
十八日夜、存心館が法学部学大に基つて再封鎖された。しかしそれを認めぬ民青が実力排除のり出した。攻防をめぐって火えんびん、投石、放水の混戦があり、負傷者二百名、危篤一名が出た。今回の機動隊導入は、その混戦による暴行罪、傷害罪、凶器準備集合罪適用のための学内捜査が主である。捜査令状による機動隊の学内立入りである。

十九日、学内は一面中に機動隊が導入されるという緊張の中にあつて騒然としていた。私は実際のところ、下宿で本を読まば、学内で機動隊の立入りに対し反対の行動を起すまが迷つていた。しかし機動隊の学内立入りにハッキリした立場をとらないと、これからはスツットこのまま駄目な状態になっていくような気がして学校に徹夜した。

中川会館の封鎖パレードは私にいろいろな問題を提起してきた。私は大学について、学生であることについて、自分について考え始めた。入試前日、存心館横の地べたに坐りこみ、闇の中にそびえる封鎖された中川会館は、大学とは、学生とは、自分とは？と問いかけていた。

国家権力―私は私の生活がそれに支配されているのに、どうしようもないものを感じていた。「極東の安全と平和」を掲げて沖繩県民の命を圧殺し闘いを弾圧する。沖繩県は出生児にシカによる身障児の発生率が高いという。女が子供を産むのに、その生命の安全がおびやかされている。「極東の平和と安全」のため一機動十個もするシレット機動隊はいともたやすく買収し、東北や鹿児島などの僻地では病室になつても治療する医者がいない。真実を教へぬ学校教育、学生の大学闘争を連中共にそのかさされてやつてはいる暴力学生と呼ぶ政府、朝日新聞にみられる政府の健康で文化的な生活とやらを教へる「常識」や一般の風潮で正しいものを見失わせようかしている政府、進学で考えることをさせず人間を記憶暗誦する機械にしてしまつてしまつた現在の高等教育、私が受けてきた教育が何が見失わせたかについて対する怒り、そういうものも怒りをこめて、私は「機動隊封鎖」のシレット機動隊を青へんにシレット機動隊にすまけ、政府に、国家権力、また自らのブルジョア性にむけて叫んだのである。

史料10

マルクスやレーニン、サルトルといった思想家がおしやられた時代はもう三〇年近くも前のことになる。不思議なことには彼らの思想やイデオロギーを通すと世の中がやたらすっきりと理解できた。そのことを単純な善玉・悪玉に区別できたし、曖昧な部分については実存という助け舟もあつた。権力＝悪で民衆＝善、資本家が悪で労働者が善、アメリカは悪といった具合であつた。人によって中国やソビエトが善になったり悪になったりするが、私には疑問の部分であつた。が、そんな違いはたいした問題ではなかつた。

史料11

柴田翔

例えば、あの頃の主題のひとつはゲバルトで、「現代の理論」でも僕は始めから終わりまでゲバルト反対を書いていたけれども、ただゲバルトが出始めた時には、その意味が充分分かつていなかったという気がする。僕がその時考えたことは、ゲバルトは国家の暴力装置に対抗するための対抗暴力として出てきたと理解した。僕はたとえ対抗暴力であつてもゲバルトには反対だつたけど、現象としてはそう理解していた。ところが大学の教師である自分の目の前で学生たちがゲバルトを振りまわしているのを見ていううちに、そういう側面もあるけれども、それは言つてみればタテマエで判つてきた。そうではなくて、連中はゲバルトを持ちたいから持つていたんだ、ゲバルトを振り廻すこと自体による喜びを感じていたんだという気がした。……ところが戦後日本近代、戦後民主主義が前提になっていた人間観のなかには、それが含まれていなかった。人間は本来理性的な動物であつて、暴力衝動などはその人間観の外に追いやられていた。全共闘の連中と全く非生産的ないさかいを毎日やつていううちに、そういうことが判つてきた。

史料12

大学紛争はどこから始まるのか特定するのはむずかしい。東大の医学部などの発端はあるにしても、もっと長い、全体の流れを見なくてはわからない。六〇年安保がつぶれたあと、セクトがどんどん形成されてはわかんない。分かれてケンカを始めて、あちこちの大学でそれなりにハゲモノの争いがおこつた。六〇年代半には、京大のかなり前の部分は民青系になつた。しかし少数派としていろいろなセクトがあつたし、ノンセクトだけれど、平連のようなベトナム反戦グループが出て来たりする。七〇年頃の荒筋的な学生は「平連、あんなの、市民運動なんかとバカにしたりもした。セクトはそういうところに入らうとしたり、そこを取らうとしたり。もともととがんなばらなくちゃ」とセクトに入る人もいるし、そういう人を取らうというセクトもあるし、逆に中に潜りこんで自分の思うようにしようという動きもある。それに対して民青系がいるから、非常に大まかに言つて、全共闘系と民青系があることになる。大学で自立したのは東大だし、ほかには、京大の中核系の学生一人が死んだ一〇・八羽田闘争、そして佐世保に空母エンタープライズがやって来たり、米軍機が九州大学に落ちたり、そういうものが動き出すのが、六〇年代の後半。

しかし、これは日本だけではなく、世界的な動きでもある。フランスの五

史料14

遠い日に買った一枚のレコードの日付と場所を覚えてはいるなんてめつたにあるものではない。いまやCDの時代、レコードはほとんど聴くことのないまま埃をかぶつておいてあるが、仕事部屋のサイドボードに、かつて買ったレコード盤が立て掛けである。百数十枚あるが、そんな記憶を残しているのは一枚だけである。LP盤のレコードで、『新宿の女』演歌の星・藤圭子のすべてと刷り込まれている。濃紺色のジャケットに、黒いベルベットのワンピースをまとった少女が、白いゼターを抱え、遠くを見つめて立っている。

買った日付は一九六九年四月二十四日。なぜそんな日付を記憶しているかといえば、東京・上野から起新橋まで乗車された九日の翌日であつたからである。留置された罪状は公務執行妨害などであつた。

この年の一月、東大の安田講堂騒動があり、全国の大学は軒並みパレードで覆われた。私の通つていた大学もそうであつた。秋、沖繩返還をめぐる佐藤首相の訪米を実力で阻止せんとする。十一月決戦。が最大の闘争課題であつた。すでに学生反乱の渦巻きは過ぎ去つていた。

自身の青春期の内面を書き記すことはむづかしい。無意識のうちにも粉飾をほどきし難い。さしつかへなく、さまざまに浮かぶものはあるが、シンプルに自画像を取り出していえば、多分に内向的ではあつた。たが、とくに高校生でも文学青年でもない、ただの一般学生であつたと思う。

毎日、校内で置かれるビラに踊るスローガン「決戦」も「世界革命」も「大学解体」もなにも信じてはいなかつた。書いてある人たちはどうもそうであつたろう。原理原則を押しつければ、要は既成のあらゆるもののノンであるいは強きものへの反抗だ。振り返つていけば空想な騒ぎであつたにせよ、それはどこかで自身と触れ合つていて、適性であれ無防的であつた。青春期の空想を満たしてはいるように思ふ。ただ、それがこの騒ぎに身を投じた多くの学生の心根であつたように思ふ。

学生B ギャバ神を祀っている者の一人として発言したいと思つて、僕はギャバ神は角材とヘルメット、それにせいぜい火槍の程度ですが、それは現代の国家権力の中枢としての自衛隊とか機動隊とかの暴力装置に対する人民の意志表示だと思つて、僕はささやかながら革命を志向する者として、それらのような形でぶつち出すのかという問題を立てているので、全人民は自分自身を解放するためには武装する権利があると知り、その限りギャバ神や火槍は全人民の革命への意志統一として正当であると考えています。

先程高橋先生は、様々な党派の思想的、政治的乱戦状態から新しい変革をもたらされると言われたのですが、内閣(内部ギャバ)に関しては僕は今のところそれを正当化するつもりはございません。しかしそれをもええなら、それ以外にはとる道がないんだという形もあってやっています。

司会 ギャバの意味を聞いたのですが、それは論理的に必然である、あるいはこれしかないんだという形では大情勢のな切り方がなされると思っています。僕はむしろ革命的規律性というのはそういう形の中からは生まれてこないのではないかと思つて、きわめて理想主義的な見方かもしれませんが、革命を志向する者はその過程において自分のめざしている社会のあり方とてむくむく行動をとらざるを得ないという事は、仕方がないという事です。僕は自分がギャバ神を持つことを否定していませんが、ギャバはあくまで自己矛盾したものであって、常に「ギャバ」「ギャバ」と言ひながらやらざるを得ない、その心のいたみが絶えぬ自己への問いかけにならないといかないと思つています。その点を言ひたかつたのです。

学生B 今言われた矛盾はよくわかるのですが、僕はカッコーイ死だというのはできると思つています……先生の「憂うつなる党派」におけるように、だんだん人間性が崩壊してゆく過程で自分が死んでゆくという事が、僕にはとても耐えられないのです……それよりは、今は日和って寝ている方が幸福だなど考えるのですが……

甲略

学生B 僕は四回生ですが、今現実的に卒業や大学院入試が迫っていて、どうしようも迷っています。現実の問題として入試中止といった事態も起りかねない時に、先生や闘争を起している諸君は一体どんな態度を持っていますか。卒業生入試をひかえた者としてどう考へておられるか。司会 それぞれ個人が解決する問題でしょう。それは

自分自身が抱えている矛盾であって、個人的なモロイヌムは克服されるべきではないと思つてます。

学生B 個人の問題といわれたが、全く抽象的に大衆とか人民、とか言われても、現実的にはそれで全ての人間が含まれているかどうか疑問です。むしろそれは君達の論理の正当化ではないかと思つてます。

学生B おこられることを覚悟していますが、反戦的な闘争の運動をするんです。それは自分でどうも大きな矛盾ですよ。それにしても僕は堪えなければならぬ。それだけいふ形でも、何かは、きつりした解を求むる必要がなければならぬ。人間争いに入らぬかというのをおかしいと思つてます。人間は機械的なものに推していかねばならぬ。それでこそ思想が深化し、闘争が進んでゆくと思つて。僕は労働者と進歩すると言つても、労働者と一緒でモッタリ「かんばつてくれ」と言つたりすることはない。現代の体制の中で支配者、加害者にならざるを得ない学生としての自己を打破してゆくことですよ。だから高橋先生も本気で労働者や市民と進歩しようとする、現代のイデオロギーを打破するような小説を自分自身の中で作ってゆくべき、先生は高橋自身を乗り越えることですよ。してか学生や労働者と進歩を言ひたいです。

個人と個人の進歩はやはり信念としてあると思つてます。学問や生活の領域が通じていても、本心に解決し、解決し、めどとする人はたゞと進歩してゆけると思つておられる。例えばギャバや吉田松陰が僕にとって魅力的なのは、彼等が革命家だからというのではなく、人間としてのギャバ、人間としての吉田松陰が「お前ならなんだ」「お前の生き方はどうなんだ」といふ言葉をつきつけておられるからです。

正に彼等に対して僕は尊敬があるのです。ストサムやカッコーイで戦っている多くの青年が僕達に死んでゆくわけなんです。お前の死いなんだ」と。個人間の解決の仕方は通じていてわかるのじやないか。個人間の解決の中で死ぬゆく矛盾は生れれば生れれば、その解決において初めて進歩しようがあると思つてます。

本日休講
大学紛争を考へる

(5)
現に高橋先生が「大学紛争を考へる」という本を書かれたのは、9月15日のことです。この本は、高橋先生の「大学紛争を考へる」の要約集として、9月22日の日曜日に出版されました。この本は、高橋先生の「大学紛争を考へる」の要約集として、9月22日の日曜日に出版されました。この本は、高橋先生の「大学紛争を考へる」の要約集として、9月22日の日曜日に出版されました。

一相手の論理をやっつける用語ナリ
「ハッ、ラゴーマ」「ぶぎけるな」などと
同じ意味ナリ



史料 20

予も集会にも何度も参加した。印象深いのは、一九六八年十一月二十一日の国際反戦予
一の集会と、十一月二十二日の「東大・日大闘争勝利 全国学生総決起集会」である。い
ずれも、安田講堂前に多くの学生が集結して、その熱気たるやさまじいものだった。と
くに十一月二十二日の集会のことはよく覚えている。東大共闘の代表、山本義隆と日大
共闘代表の秋田明夫、全共闘運動を象徴する二人が揃って演説を行った。私も全国から
集まった二万人とも四万人とも言われている学生たちが支援した。私もクラスの旗を持っ
てその集団の中にいた。実際の人数は私にもわからないが、安田講堂前から正門や赤門の
ほうまで学生が盛り込んでいたこと、学校内だけでなくお茶の水から本郷まで学生があ
れて機動隊が大学に近寄れなかったことを思えば、四万人というのもあるが嘘ではない
と思う。この日のお茶の水周辺はまさに騒乱状態だった。

しかし、私はこの後にもなく学生運動と決別することになる。「大学解体」というキ
ワードが出てきたからである。大学を良くしようという考えには賛同できても、「解体」
にはついていけない。こういつた運動ではより先鋭的で戦線的な活動が勝つていく。
私のように生ぬるいことを言う人間は、「日利見主義」「闘争から逃げるのか!」と罵倒
された。でも、もうついていけない。そういう意味では、私は本当の革命的な精神を持
ていなかったのかも知れないが、生理的にこれは違うと思ってしまうのだ。

史料 21

—— 慶應の学費闘争をきっかけにして、翌年以降、早稲田、明治、中央と次々に学費値上げをめ
って激しい紛争が展開されていく。あの時期の紛争の前半はまさに私学の学費値上げ反対闘争が中
心となった観があります。先生も、学生の動きがそれまでと違って来たといわれましたが、いま振り返
返って驚かなくて、どうもお感じをおもひにりますか。

石川 あんまり適切じゃないかもしれませんが、あの紛争のなかからかなり新しいものが生まれたか
らと見ておられます。どうも現実とのギャップを考えた上で、あのころより新しいものが生ま
れたというよりは、あまりないような気がするので。だから、そういう意味では、よく卒業生が
金づいて、「やはり正常な状態のもとで、正常に教育研究の機能をおこなわれているなかで、日々
改革を考えるということが、いちばん確実で効果がある方法なんであって、ああいうかたは、どう
も教育研究の場にはなじまないんじゃないか」ということをよく話して下さる。それから、運
動そのものについて言えば、かれらの現実に対する批判、反発というものは、外国の影響を大きくして
も、わからないことはないんですけど、批判の後にはどういふ構想をもっているのか。かれら
はよく大学解体という話をしていたんですけどね、いったい大学を解体してその後何がある
のか、そういうプログラムはなんにもなかったわけですね。したがって、ああいういきなりというの
は一種の無政府主義みたいなもので、それを着目している人々にはそれ以外のものも考えられないけど、しか
し一般の学生の共感を得るといことは非常にむずかしいんですけど、そういう意味では、一般の人も
そうだろうと思えます。いまだにかれらが、積極的何のめざしていたのかわからない。その反発
はわかるんですけど、批判もわかる。だけど積極的自分たちが提示しようとしたことがわからないと
いうことが、一つの特徴ではないでしょうか。大学紛争の教訓をとり入れて新しく大学を改革した大
学があるとしたら、私は見てみたいと思います。

だからそのあたり、あの大学紛争はいったい何だったのかという感じですね。あるいはもしか
ずと、私たちがもう一度大学を築いていく、改革していくことについて、ああいうやり方ではできな
いんだというのを教えてくれる、そういう効果をもったのかも知れないという感じがしたいですね。
—— そんな感じですか。私は、
—— 逆に言うと、少なくとも慶應大学に関する限りでは、あの紛争は大きな傷跡を残さなかった
石川 私はそう思いません。つまりかれらの運動は、われわれを対象としたけれども、自分たちは
じめて自分たちが終えた闘争だったと思えますね。

史料 23

—— 京大紛争というのは、大学改革論というようなことは、少なくとも中心テーマにはならな
かっ
たんですね。

岡本 あえてしなかった。日本の大学全体としても、あのときわりあい、京大なんかのように、フレ
クシブルなというか、よらよらしているというか、なんにも残さなかった。ドイツなんか、大学紛争
のあいだに大学制度全般の見直しをやって、学生参加を実施し、四者共同とか重大な改革をやった。
その後、それでは学費の運営ができていないという反省から憲法裁判をやって、どんだん元に戻して
いるんですよ。日本では、ああいう合理的というか正直な行き方はしていないんですよ。

—— 全共闘の要求というの、奥田先生がおっしゃったように、最初から大学が、呑めそうな
いやつを探してきて、それをきつかけに運動を盛り上げようとする。要するに運動の方法論としての
要求で、大学のあり方を問うという。抽象的に帝国主義大学解体というだけで改良志向じゃな
かったということ。改革論議に結びつかなかった原因はそれですね。しかし、民青系は改良志向
でしようし、東大なんかには京大は民青系が強かったんじゃないですか。

奥田 もともと強くなかったけれど、紛争以来、民青は非常に弱くなってきた。
岡本 民青に対する批判の考え方が違うものが、たいへん京大紛争全体を支配しましたね。だから
学生部とかは、わりあい、全共闘のほうに親しいんですよ。学生部長なんか学生部におりますからね
それあの激しい運動中でも、学生部長や総長に、全共闘は悪態をもたないんですよ。

—— やっぱ、全共闘に対するシンパシーみたいなものが、一般的にそこはかたくなにあったん
ですよ。
岡本 民青に対する批判が、あんなことになってしまっただけです。
上柳 これはね、私の感じでいうと、一般学生にも二つのタイプがありましたね。やはり民青に好意
的なグループ、これは、かなりあるんですよ。けっしてそう孤立していたとは思わな
い。しかし、全共闘系運動のシンパシーをもつ一般学生もかなりいて、やっぱ両方ありましたね。こ
れは複雑なものだと思えます。

—— 僕はいまになって思えば、かなり苦勞はしました。あの紛争の過程においてね。しかし、まあ
非常にきれいに切り取られ、脱落する古い理想主義の最後のがあつたという感じがします。
それから、日本社会全体がもう現実主義になりました。かれらはじょうずな表現してなかったけ
れど、かれらが無意識におそれていたものが出現した、というふうにも言えるような気がする。完全
に現実主義の社会になりましたね。いまの新人類から見れば古いでしょうけれども、なんか古風な理
想主義があつたと思うんですよ。それはもう失われつつあります。そういう意味では、なんかやっぱ
寂しいという感じがちょっとあるんですよ。あのとき思い出して。

—— それ、私もたいへん苦勞はしました。ただし、私自身、やっぱ京都大学というのにはよかつたな
あと思うのは、いろいろのことがありましたけれど、僕は鈍感なほうなからしめませんけれど、あ
まり身体の危険というものは感じませんでしたね。それは当時の学生に甘くなっているところ
あるのかも知れませんが、やっぱ、樹のそばに一種の理想主義と理想主義と、一種の
シンパシーというものはあります。たいへん苦勞はしましたけれど、そういう古風な理想主義と
いうのがね、嘲笑されるような風潮がいまの社会にだんだん広がって行くなら、やっぱ困るなとい
う気持ちがあることはありますね。

史料
25

自己否定とは本来、自己の存在をかけた問いでなければならぬはずである。それは、旧来の自己のままではこれ以上進むことも退くこともできない、ニッチもサッチも行かないという、苦痛に満ちた精神のどん詰まり状況の痛切な自覚からはじまるものである。したがってそれは、旧来の自己をいったんゼロにし、そのうえで再出発をはかるという、自己破壊的であると同時に自己建設的であるような、そうした思考の往復運動である。生まれ変わらなければならないのだ。生まれ変わって初めて旧来の自己の中から湧き上がるべきものを発見することもできるのだ。それが本来の自己否定というべきものである。自己否定とは、勇気をもって自分をゼロにし、そこから再出発する決意でもあるのだ。

全共闘シンパを自称する多くの人々は、その後、高度成長下の企業社会に「舟」に入っていた。カタチは映像としての「自己否定する自分」への強い共感を残しつつ、多くの者がすでに精緻に組み立てられてある社会に飛び立って行くことになった。彼らを受け取っていたのは、「我が社（我が組織）が繁栄してこそ自己実現が可能となる、そうした意識が常識となっている社会であった。そしてすでに歴史的な事実となっていましたことだが、あつという間に多くの全共闘戦士が企業戦士に変えた。

こうした現象が全共闘世代の「転向」と呼ばれることがある。だが転向だろうか、と僕は思う。それはむしろ平行移動だったのではないか。そもそも彼らの主要な関心は「自分」にあった。過激な運動の果てに着地したのは「自分」だった。自己存在への疑問の契機は運動の中でつかみ取ったものの、その後の再建を果たせないまま、再建の余地「空間」を残したまま、社会に飛び出してきたのだ。自分への関心という抜け殻だけが残った。その後に何かを充填しなければならなかった。

充填するものはいっぱいあった。それは会社至上主義であり、きらめくような大衆消費社会の魅力であり、競争を原理として成り立っている社会には、充填する素材に不足はなかったのは当然だろう。全共闘戦士たちが企業戦士に変身していく過程は、僕の想像以上にスムーズな流れだったのではないかと思う。けっして転向などといえる、上等なものではなかった。転向には転向なりの人間的苦悶・精神的葛藤があつたはずなのだ。

史料24

<随想>

大学紛争をめぐる

名誉教授 富田 和久

研究生生活は一進一退というのが実情で、ふりかえて特別の時を想起するのは容易ではありません。これに較べると、私が理学部長（1969～71年）を仰せつかったのは、学生を含めて全学が紛争のために揺れ動いた時期に当たっていたので、その強烈な印象は今も忘れません。



当時は、部局長の会議も殺気を帯びており、「北の果に往まっている人には、時計台の下で何が起っているか分らんでしょう」などと罵られたりもしましたが、それでも、学生は何を求めているのか、大学として今何をするのが正しいか、など、一人の人間として考えつめていた時のことが、昨日のこのように想い起されます。

理学部では、学生諸君の要求を容れて、専門課程における課目選択の自由度が著しく拡げられることになりました。しかし、部局によっては話がこじれ、学生の行動がエスカレートして行きました。かくて、大学全体としては、1年余り右往左往した揚句、京都大学は外部の力に依存して学生の行動を規制し、そういう形で事態は鎮圧されました。しかし、このような処置は果して正しかったのか、今だに疑問は去りません。——当時、私の気持としては、そういう段階がくる前に、せめて大学として、何故この様な紛争が起ったのか、その原因を見定める位の見識を示してほしい、という秘かな期待をいっていました。耳に入ってくるのは、学生の志気昂揚を「はしか」呼ばわりする物知り顔の声や、対策と処置に終始して「冬眠作戦」を公言する窓口的発想ばかりでした。——たまりかねた私は、ある時、教育学部の先輩教授に、専門の立場から紛争の事態をどう見て居られるか、と尋ねて見ました。ところが、その答は、

「教育学部の受持は下級学校の問題に限られ、大学は扱いません」ということで、私は倚りかかろうとした柱が揺いだような感じを味わいました。

学生諸君とは随分話し合いましたが、事態が慌しくなるにつれて、ゆっくり腹をわって話をすることが難しくなって行きました。——鎮圧は学生諸君にとって明らかに挫折でした。——挫折によって若者は暴力に走るか、恋愛におちる、——という友人の見通しが正しかったか否かは分かりませんが、行動的に挫折した若者達が、言論的に沈黙したことは事実でした。これは言葉に対する絶望の表現だったのかも知りませんが、しかし、別の見方をすれば、若者達が志気昂揚した本当の原因、また行動の窮極の目的が何であったか、ということについて、彼等自身、その把握が必ずしも充分でなかったことを示しているようにも思われます。

そういう訳で、私は、大学紛争の意味という問題は、専門家を頼るのでもなく、学生の発言を受け売りするのでもなく、一人の人間として自分で考えて行かねばならぬと思う様になりました。——以来やがて20年、その間に退職はさんで、不思議にこの問題だけは念頭を去りません。それは、今日なお、基本的な問題は解決されていないだけでなく、病根は一層深くまっているように思われるからです。

話は飛びますが、最近のテレビに、生命を奪い合う実戦の場に、自ら進んで外人部隊として参加して行く日本の若者が紹介され、衝撃を受けました。さらに驚いたのは、記者の「なぜ」という問いに対する彼の答えでした。——「今時、どんな職場で働こうと周りはすべて敵ではないか……。むしろ実弾を浴びる戦場で真の戦友が生れるのではないか。……」と。

これはたしかに常識的な言葉ではありません。しかし、我々はこの言葉を根も葉もない「非常識」として笑うことができますか。私はそこに現代の文化のかくされた傷口と深い病根をみた思いがしました。——その根は、我々の社会の現実としての「人間疎外」にあると思われま

す。——あるいはむしろ技術や経済が進めば進むほど——それだけ一層「人間」が機械の部分品や、体制の素材に成り下って行く傾向があるとすれば、そこに精神的な閉塞を耐えがたく感ずる人間が現れてくるのは当然ではないでしょうか。

そう考えると、大学紛争の本当の意味は、精神的成長期にあって、人一倍敏感な若者が、社会のこのような動向に対していち早く反応し、抗議の声を上げたという面があったのだと思われま

す。——「精神革命」の要求から発していたのではなからうか。——そして、もしそうだとすれば、これを正面から取り上げず、急いで対策的に鎮圧したことは誤っていたのではなからうか。何故なら、たとえ貿易は黒字になっても、人間を疎外する社会の病根は、原理的には今も除かれておらず、しばらく地下に潜んだ後、前述の「戦争参加」のように、一層ぬきさしならぬ形で表面化する兆を見ているからです。

（とみた かずひさ 元理学部長 昭和59年退官 専門は物理学—物性基礎論）